小学校における「いのちの教育」の必要性とそのあり方についての一考察

Ａ９８－４４５２　山下良幸　（指導教官　朝倉隆司）

Ⅰ．目的

本研究の目的は、近年学校教育において必要性が指摘されるようになったデスエデュケーションについて、広く「いのちの教育」と捉え、小学校に限定してその必要性とあり方（内容）についての考察・検討を行うことである。

Ⅱ．研究方法

(1)分析方法

文献を通しての研究。絵本に関しては、TTR を用いた分析も行った。(TTR とは、文章心理学における形式的分析の指標の一つである。)

(2)分析項目

小学校における「いのちの教育」の必要性とあり方（内容)。そして、絵本を通しての「いのちの教育」のあり方と可能性。

Ⅲ．結果と考察

(1)「いのちの教育」の必要性

現代の子どもたちは核家族化などの影響から死別経験は昔に比べ減ってきているが、ペットも含めれば6割以上の人が死別経験がある。そして、９割近くの子どもが「死」について考えたことがあるようである。しかし、そのことについて誰かと話し合ったことがある人は２割程度しかいないのが現状で、子どもたちはその考えを誰かと共有することはほとんどないのである。このことから学校という場で「死」について語り、「いのちの教育」を通して共に学ぶことは必要であると私は考える。

(2)「いのちの教育」のあり方（内容）

子どもの「死」に関する認識の発達段階を学校制度（低・中・高学年）に当てはめ、「いのちの教育」の内容を試案した。その内容は、医学・生理学的領域、心理学的領域、社会・文化的領域の三つの領域に分けて検討した。右の表はそのうちの心理学的領域についての内容を検討したものである。(他の領域の紹介は省略する。)

教育内容	小学校低学年	小学校中学年	小学校高学年
悲嘆のプロセス一悲嘆教育として一	身近に飼っているペットの死や、絵本などを通して感じる悲しい気持ちなどを、みんなで話し合い共有する。そして、その感情を理解する。	自分の家族や親戚、友だちを亡くした時の悲しみの気持ちをみんなで分かち合い、人は愛する人を失った時、精神的に大きな打撃を受け、様々な感情を抱くが、やがて立ち直っていくことを学ぶ。	ペットや家族、親戚、友だちを亡くした時に抱く感情には、一般的に多様な動きがあることを理解し、また、それらの過程にある人々や自分自身にもある死への不安や恐怖についても考え、冷静に分析できるようになる。

(3)絵本を通しての「いのちの教育」

本研究では、「わすれられないおくりもの」・「葉っぱのフレディ」の２冊を取り上げ、その本の価値と可能性について考察した。TTR を用いた分析では、この２冊はどちらも本に含まれている情報量は、小学生なら理解できる程度であるという結果が出た。内容理解に関しては低学年でもできると思われるが、心情理解となると、「死」の概念が形成されると考えられてる中学年をこえないと理解できないと思われる。しかし、発達段階によって物語の捉え方は少しずつ違ってくるので、目標の段階設定が必要である。

Ⅳ．結語

本研究では狭い視点からではあるが、その必要性が認められ、その内容についても考察した。より幅広く考えることが今後の課題である。

子どもにとって「いのちの教育」は大切であるが、このテーマは教え込むのではなく、共に考えることが重要である。そのため、教師側の姿勢も重要であり、教師に対する教育も今後必要となってくる。

Ⅴ．主な参考文献

＊アルフォンス・デーケン「生と死の教育」
２００１（岩波書店）